

ハンター北壁登攀と日本でのクライミングとの関係について ～フレンチガリーからハンターの山頂へ～

鈴木啓紀 (G登攀クラブ代表)

ハンター北壁を抜け出す最後のロックバンドは、M5という決してタフではないグレーディングがされていたが、我々と入れ違いでムーンフラワーを登った若手のチームから、このセクションは氷の発達が悪くて非常に悪かった、という話を聞いていた。実力ある彼らから、「悪い」と聞かされていた我々は、内心少しビビっていたのだった。

そのセクションにたどり着いたのは壁を登り出してから46時間後のことだった。少々緊張しながら登り出す。やさしい冰雪壁から氷が薄く張り付いた凹角へ。確かに氷はスカスカで、まったくスクリュウが効かない。ここで落ちたらけっこうひどいな、と思いつつ凹角の氷と、右壁の細かいフットホールドを丁寧に拾いながら体を上げていく。

その時に頭をよぎったのは、国内で積み重ねてきた冬季登攀のことだ。錫杖で、明神で、谷川で。このようなレベル感の緊張するミックスセクションを、今まで、一体自分はどれだけ登ってきたと思っているんだ、と。その瞬間たしかに、自分のクライミングの蓄積が背中を押してくれていることを感じた。集中しつつもどこかに余裕を感じながら、この最後のロックバンドを突破することができた。標高と疲労の影響だろう、息があがってしまう。

今回のハンター北壁は、私とパートナーの大石明弘にとって、2019年5月に続いて二度目のトライだった（実のところ私は、2005年にも一度この壁に取り

ついたが、この時はあっさり敗退している）。2019年のトライはデプリベーションのラインに取りついた。登り出してから30時間かけてサードアイスバンドに這い上がり、ムーンフラワーバットレスに合流したところで、悪天とチリ雪崩によってはじき返された。悪天の中、発達の良い氷と初見の壁（トポはあったが）の下降は極めてタフで、敗退を決めたポイントから氷河に降り立つまで、4時間ほどの不快な休憩を挟んで24時間を要した。氷河に降り立ってからも、視界がない中、往路のトレースなど影も形もない平坦でただっ広い氷河の上を必死にベースキャンプに帰り着くという、最後まで真剣勝負を強いられる山行になってしまった。

翌朝、分厚い雲に包まれたままのハンター北壁を見上げ、私と大石は、「いい登山だったな」「またもどってこよう」というような会話をぼそぼそと交わした。私たちにとって、ハンター北壁は何としても再訪しなければいけない対象になっていた。

2021年の秋、私と大石は来春のハンター再訪を決めた。そして、21年から22年にかけての冬シーズンは傾斜のある氷を登りこむことでアラスカに備えた。前回のアラスカを通して、改めてあの手の壁のポイントは、日本ではなかなか体験することがない、傾斜は強くないものの、一様な傾斜がひたすら長く続く堅い氷のセクションだと強く感じていた。米子不動の味とも、阿修羅や夜叉、そして錫杖岳北東壁の右ルンゼなど、国内屈指の氷のラインでよいクライ

ミングを積み重ねることができた。また、平行して近場の山を走り、フィジカルのコンディションも上げるべく努めた。

2022年5月、3年ぶりに眺めるハンター北壁は相変わらず、でかく美しい。

天候がひたすら安定しなかった三年前と違い、天気は安定しているように見える。壁を子細に観察した結果、コンディションが良さそうな上に情報も乏しく、未知の要素を楽しめそうなフレンチガリーに狙いを定めた。この年は日本の実力ある若手トリオが三度のトライでムーンフラワーをファイナルアイススロープまで登り、これまた強力な日本人ペアがデプリベイションをバットレスの頭まで登っていたこともあり、彼らと違うラインを、という思いも少しだけあった。

フレンチガリーから標高差1200mの巨大なバットレスを登り切った後、壁の終了点であるバットレスの頭からさらに標高差700mを登り、標高4,442mのハンター山頂を目指す。下降はハンターの初登ラインである西稜を経由してラーメンクロワールを下降、その後、ひたすら氷河を歩いてまたカヒルトナベースに帰ってくる、というプランだ。装備としては、3泊分の食料と4日分の燃料、5日分の行動食、ツェルトとごく軽量のシュラフを用意した。前回デプリベイションに取りついた際は、天候の不安定さから最初からバットレスの頭に目標を据え、食料も2泊分のみでシュラフも二人で一つ、というだいぶ軽量スタイルを選択したが、それと比較するとだいぶ腰を据えて山と対峙できる装備になった。

私たちは氷河にランディングした翌々日の夕方、壁に向かってベースキャンプを出発した。天気は快

晴。この先3日くらいは天気が持ちそうな予報であった。

22時、取付きのシュルントのかぶった氷を越え、壁に這い上がる。しかし、ガリーへの入り練りでラインを見失って右往左往した結果、ガリーの表雪壁に入りこめた時には短い夜は終わり、明るくなってしまっていた。ここからは顕著なガリーの氷をコンテも交えて登っていくが、ところどころ傾斜が強く悪いミックスや立った氷も出てきて消耗させられる。昼までには抜けることができるだろう、と目算していた巨大なガリーを抜けることができたのはもう夕方遅い時間帯だった。ガリーのトップからは、下からは見えなかった氷のラインに導かれ、壁本体のアイスバンドに入っていく。しかし、このアイスバンド、50-60°の堅い氷の斜面で、ゆっくりと休めるような弱点はまったく存在しない。上部へ抜ける弱点を探しながら、右へトラバース。だいぶ消耗しており、体は重い。ロックバンドに食い込む氷のラインはしかし最後氷が切れ、イマイチな視点を見下ろしながらのテクニカルなミックスクライミングになった。その上のグズグズの壁を大石が突破してくれ、ようやくやや傾斜の落ちたバンドに抜けることができた。氷からお座りビバークができるテラスを切り出すことができたのは、登り出してからゆうに24時間以上が経ったころだった。しかし、ギリギリ座れるレベルのビバークサイトで、ほとんど眠ることはできなかった。

翌日は、日本の冬壁によく出てきそうなやや傾斜のないミックス壁を越えて午前中の早い段階でサードアイスバンドに飛び出すことができたが、この50-60°のアイスバンドのトラバースに苦勞させられる。ふくらはぎが焼き付くようなトラバースを延々とこなし、ムーンフラワーバットレスのラインに合流。3年前に敗退したポイントがすぐ下に臨める。前の

4. その他

パーティが残したテラスがあり、また陽が当たって暖かい時間であったことから、3時間ほどここで休憩した後、ムーンフラワーを辿って壁の終了点を目指す。後2-3ピッチでファイナルアイスロープ、というところで天気が崩れ出した。

肩で息をしながら、最後のロックバンドを登りきるころには、吹雪と日没で視界も効かなくなってしまっていた。大きな岩の下を削り、再度のお座りビバークとなるが、例によって眠ることはできなかった。夜半には天気は回復し、壮大なフォーレイカーが雲海の上に浮かんでいた。

翌朝はバットレスの頭を目指し、最後のアイスロープを登っていく。鋼鉄のような氷が一様な傾斜でひたすら続き、本当にここがハンターの核心なんじゃないかと思うくらいきつかったが、正午にはバットレスの頭にたどり着くことができた。

バットレスの頭から見上げる山頂へと続く稜線は、なかなか厳しそうな代物に見えたし、何より我々はあまりにも消耗していた。まだ昼ではあるが、バットレスの頭でプラットホームを切り、暖かい日中のうちに眠ることにした。

正直に告白すると、私は自分の消耗具合とこの先の天気の不安から、ここからの下降に心がだいぶ傾いていた。しかし、大石の山頂へのモチベーションは決して消えたりはしていないようだった。

「山頂まであと標高差700mだ。そんなレベルの登山は、日本でも散々やってきただろう？」

そんな大石に強気に導かれて、私も肚を決めることができた。休憩と補給をして再び眺めた稜線は、先ほどよりもだいぶ登れそうな代物に見えた。

結局我々は、このバットレスの頭のプラットホームで18時間近く休み、翌朝6時過ぎ、山頂へ向けて登り出した。不安定なリッジを同時登攀で進み、顕著

な岩峰を左から回り込んで登っていくが、部分的に被った氷河氷も出てきて、なかなか楽をさせてもらえない。えんえんと雪稜を登り、小さな氷河を横断して山頂へと続く雪稜に取りつく。もう気分的には1週間くらい山を登り続けているようだ。

雪稜の傾斜はだんだん落ちてきて、目の前に山頂が見えた。バットレスの頭から6時間強、我々は静寂に包まれたハンターの山頂に立つことができた。背後には巨大なデナリ南壁、正面にはフォーレイカー。そして周囲に広がる広大な氷河とその周りに連なる九州な山々。予報ではそろそろ崩れそうだった天気は、しかし幸いにも快晴で風もなかった。山頂で大石と何か色々とお話したような気もするが、もう何も覚えていない。

山頂から西稜を辿って下降する。西稜を2時間ほどたどり、巨大で顕著なギャップの手前から南側のラーメンガリーへと下っていくが、ここは数日前に南側から新ルートを開いて山頂に達したアンカレッジのクライマーのトレースに相当助けられた。ラーメンガリーの出だしは非常に急峻な雪壁となっていて、継続して緊張が強いられる。後ろ向きのクライムダウンを延々繰り返して1000m以上一気に標高を落とし、19時前に平坦な氷河に降り立つことができた。カヒルトナベースに向かって歩こうとするが、雪が緩みすぎてラッセルが厳しい上にクレバスへの不安もあり、雪が安定する明け方を待つことにした。ハンターを吹き降ろす風は氷のように冷たく、その最後のビバークは、よくこんな薄い装備でここまで耐えられたな、と感心してしまうくらい寒かった。

寒さに耐えきれず2時には歩き出し、非常に恐ろしいクレバス帯を抜け、広大なカヒルトナ氷河をひたすら歩いて、カヒルトナベースに帰り着いたのは朝8時、ベースを出発してから100時間以上が経って

いた。

この登山では、日本ではなかなか体験できない、「ひたすら同じ傾斜が続く堅い氷」に非常に苦しめられた、というのが正直なところだ。しかし同時に、日本でのクライミングや登山を続けていたからこそ、山行を通して、局面局面である程度の「余裕」を作り出すことができ、そしてその「余裕」によってラインを山頂までつなげることができた、というのもまた事実であるように思う。
またこのような登山ができたらと思う。

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

現地時間の2022年5月17日夜、この旅を共にしていた山岳カメラマン、平賀淳さんが、カヒルトナ氷河上でヒドンクレバスを踏み抜いて転落、亡くなってしまった。バットレスの頭でビバークする私たちを撮影した後、ベースキャンプに戻る途中の事故だった。享年43歳。エベレスト登頂経験もある日本を代表する山岳カメラマンで、大石明弘の旧友でもあった。

偉大なカメラマンでありながら、その魅力的な人柄で多くの人々を引き付けてきた平賀さんに、そして平賀さんのご家族、友人、平賀さんを思う全ての方々に、心からの哀悼の意を表したい。

平賀さん、どうか安らかに。